実と剛「次男の選択」（1）

見慣れない青年がいた

来月8日、東京・両国国技館で初日を迎える「11月場所」は本来九州場所（福岡開催）のはずだった。新大関・正代は熊本県出身だけに、ご当地場所。地元の人たちもさぞ残念な思いだったろうが、今年はコロナ禍で5月（夏場所）が中止になり、7月名古屋で行われるはずの場所も両国で行われ、9・11月も同様東京開催となった。

大関昇進パーティーなどが今後無事行われればよいのだが…。先に大関昇進した朝乃山も昇進の祝い事は行われていないし、「これから横綱を目指します」と大きな会場で高らかに宣言する機会が見いだせないのは寂しいことだ。

ところで柏戸が大関、横綱に昇進した祝賀パーティーで財界・経済人などが多い主賓のテーブルに見慣れない青年が座っていた。角界関係者ではない。タニマチ（後援者）にも見えず、周りからいぶかしがられたが、その人こそ彫刻家・富樫実だった。

ゆ～Ｔｏｗｎ前の「空にかける階段」。写真は母狩山・金峯山が背景だが月山、鳥海山がバックだとまた味わいが変わる

「空にかける階段」作者

鶴岡市内各所に数多くある作品「空にかける階段」で知られる実は昨年11月、89歳で亡くなった。天空に向けて描かれる作品のフォルムは力強さを感じさせる。

実と柏戸（富樫剛）は親同士がいとこの関係。実の父（幾蔵）と剛の母（かつゑ）で、子供たちは「又従兄弟（またいとこ）」となる。そして実の家は富樫本家、剛の家は分家という間柄。年の開きは7つあったが、ともに当主の次男同士でもあった。

柏戸は昭和29（1954）年秋場所16歳で入門し、翌30年、初の地方場所3月の大阪・春場所を迎えたが現地で唯一頼ることができたのが7歳年上の「本家の実にいさん」だった。

若き日の実（左端）と剛（中央）。互いを激励し合った

遅れてきた美大生

当時、京都市立美術大（現京都市立芸術大）2年生で24歳。遅れて入学した大学生で無名彫刻家だった。一方関西に身寄りのない〝弟〟を何とか激励したい。剛も関西入り後、無邪気に「肉が食べたい」と連絡してきた。

そんな時、手元不如意であっても「おう、これを食べて精を付けろ」とできる範囲で高級牛肉のすき焼きをごちそうした。その後、7月名古屋場所も本場所に昇格、京都―名古屋間は国鉄（現ＪＲ）以外に近鉄電車なども走り、交通の便が良いため年2回の〝激励会〟が恒例になった。

剛も出世が早く、関取昇進後はごちそうしたり、されたりの関係になったが、子供時分からの絆は大関、横綱になってからも続き、剛も関取昇進前にしてもらった恩義を終生感じていた。

母方の血が騒いだ

実は会った時は「体に気を付けろ。自分のできる精いっぱいのことを頑張れ」などと励まし、あとは庄内の言葉で故郷を懐かしんだ。

富樫本家の男兄弟が皆目指した藤島地域の庄内農学校（現庄内農業高）を自らも目指し、入学・卒業した。

ただ次男でもあり、家を継ぐわけにはいかない。そして実母が川原村（現櫛引地域西荒屋）の仏具店から嫁入りしてきた背景があった。通称「位牌屋（いはいや）」。これがなまって地元では「えへや」と言われたものだ。母方のＤＮＡが目覚めたようだ。次第に仏教彫刻に傾き庄農を卒業後、高村光雲（高村光太郎の父）の孫弟子で仏師・佐久間白雲に弟子入りした。母の実弟でもあった白雲の居た岩手県大東町（現一関市）で修業した。そして櫛引に帰郷後、京都の美大を目指したわけだが、ここで難題にぶつかった。大学受験資格がなかったのだ。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

作品展を開催中

○…芸術の秋！櫛引地域の日帰り温泉ゆ～Ｔｏｗｎで富樫実の作品展を開催中だ。「空にかける階段」シリーズ6作品が1階ロビーに飾られている。途中、展示替えなどもあって会期は11月30日まで。

毎週火曜日付に掲載